

5年の歩みを祝う

中泊町合併5周年記念式典

中泊町ふるさとイメージアップ大使フェスティバル

町は、今年の3月28日で合併5周年を迎えました。

町総合文化センター「パルナス」で8月10日(火)、この節目を祝う式典と、合併5周年記念事業として町が任命した「中泊町ふるさとイメージアップ大使」の公演イベントが行われています。

合併5周年記念式典

合併5周年を祝う記念式典は、午後2時からパルナスで行われ、関係者約250人が合併から5年となる節目を祝いました。

式典は、中里小学校伝承部の獅子舞で華やかに始まり、続いて町長が「さまざまな取り組みがこの5年間行われてきたが、これは合併の大きな効果だ。希望の町を作り上げるため、今後も努力していく」と式辞を



任命された大使の3人
(左から三上寛氏、横山ひでき氏、木村巖氏)

述べました。中盤では、5周年を記念する事業として「中泊町ふるさとイメージアップ大使」の任命が行われ、三上寛氏、横山ひでき氏、木村巖氏の3人が登場。委嘱状とたすきを授与された3人は、にこやかな表情でそれぞれ抱負を述べました。

最後に締めくくりとして、こどもり権現太鼓保存会が太鼓演奏を披露。式典は盛会のうちに終了しました。



アトラクション：こどもり権現太鼓

イメージアップ大使フェスティバル

夜7時から、式典で任命した大使の公演イベントが行われました。

イベントは、町ではすっかりおなじみになった「金多豆蔵人形劇」からスタートし、金多と豆蔵の繰り広げる芝居に、大人も子どもも大きな笑い声を上げていました。

芝居後には、ふるさとへの思いを語る「ふるさとトーク」を開催。三上寛氏、木村巖氏のほかに、町長、教育長が加わり、ふるさとの歩みや今後を、まじめに楽しく語り合いました。

イベントのトリを務めたのは三上寛氏。ふるさとにちなんだ曲を熱唱・演奏し、イベントは幕を閉じました。



三上寛ライブ

また大使の3人は、次の日のなかどまりまつりにも参加。町の伝統で無形民俗文化財にも指定されている「なにもささ踊り」の先頭を、一緒に踊りながら練り歩き、まつりの盛り上げにも一役買っていました。



金多豆蔵人形劇

←次ページから

ふるさとインタビュー

大使の3人が
ふるさとを語ります

——まずは、大使に任命された感想をお願いします。

(三上) 今までのやってきたことが多少なりとも町のイメージアップにつながった結果かな。昔は小泊出身って言ってもみんな分からなかった。青森出身って言うのが普通だったと思っけど、雑誌のインタビューがきっかけで、今ではいつも小泊出身って言っている。何というか、響きがいいのかな、「ドマリ」って。

——合併して中泊町になりましたが、町の良さを教えてください。

(三上) 中里の人は海を手に入れた。小泊の人は広大な平野を手に入れたわけですよ。小泊の人はやっぱり海を相手にしているから、感覚的というか本能的な部分が優れている。片や平野部の人は、教養が優れているというか学ぶところが多い。お互いにあるが、あこがれていた部分を得ることができたんじゃないかな。それから、俺は帰ってくるときいつも思うんだけど、不思議な静けさ、聴覚に何か感じるんだよ。これって、ものすごく説明が難しい。不思議と耳が刺激されて自分の音楽の参考になる。

——日頃の創作活動にも影響があるんですか？

(三上) 一番影響があるねー。この感覚を捉えるまでに40年かかった感



じかなー。見えない音とにおい、何が俺を惹きつけるんだろう。世界中歩いたけど、耳がなんか探しているというか、見えないもんだから人に説明は難しいんだけど、何かがあるんだよね。うまく人に説明できればいいんだけど。

ふるさとに帰ってきたときは、取材をしているようなもんだよ。この感覚を頼りにして、新しいものを取りに来る、忘れたものを取りに来て、また新しい創作をする。町には、そういうすごいものがあるんだよ。

——その良さを説明できたら、町に観光客がたくさん来そうですね。

(三上) 俺も県内・県外の人にどうやって伝えられるのか、それは思案中なんだけどさ(笑)。さっきの音とにおいって言うのは、歴史と関係ありそうな気がするんだよな。太古の昔の静けさ、静謐せいひつが残っていると、われわれはどこから来たの

か、ルーツを探ってみるのも面白いんじゃないかな。金木の太宰とか、五所川原の立佞武多とか、周りにすごいものがあるけど、うちの町も、どこにもないもので勝負した方がいい。

——いろいろなアイデアを持っているらしいですね。

(三上) 才能があるんだけど、芽のでないアーティストをうちの町に住まわす、ってもいいんじゃない。芸術を町づくりの主眼に据えてね。いろいろな町づくりがあると思うけど、有名な所ってやっぱり他にないものを売りしているよね。価値観が多様化しているんだから、ここにしかないものを作っていくたらいいと思うよ。どこにもあるものだったら、パターン化されてしまう。地元の人々の発想で、変に中央の広告代理店なんか入れないで、素人気質でやってみてもいい。その方が、素人の怖さっていうか、とんでもないことを平気でやるから。そっちの方が面白いじゃない。

——記念式典で「誰よりも小泊を愛する人」と紹介しましたが、本当に町を気にかけてくれていますね。最後に、そんな三上さんのふる



さとへの思いをお聞かせください。

(三上) 人は、生まれたいところを選んで生まれてくる、という人がいるけど、俺は小泊をめぐって生まれてきたと思うよ。小泊に生まれて来てたくて、小泊に生まれてきたんだとだんだん分かってきた。本当に好きなんだな、ここが。何度も言っているこの「音とにおい」が好きでここに來てる。さっきからあなたにインタビューを受けているけど、何で分らないけど自分が好きだからインタビューを受けているんだと思う。俺の行動すべてが、どうしてか分からなくても、どこかで自分が好きでやっている結果なのかなと。やっぱり、俺は小泊が好きで、ここを選んでやって来たんだな、と心から思うな。

横山 ひでき



—— 任命の感想を？

(横山) 15年間仕事してきて、いよいよよきたか！って感じ。町長就任へのステップアップになったかな(笑)。正直なところ、まず「えっ」と驚いたんだけど、町のために何か、と思っていたときだったから、ナイスなタイミングだったね。

—— 町のどこがいいと思いますか？
(横山) 自然だよな、やっぱり。山あり、川あり、海あり、湖あり、田園風景。どこをとってもいいよ。地元を離れてみて分かるかも…。

—— 人はどうですか？

(横山) 人もいいよね。優しさに満ちあふれているというか。たまにこっちに帰ってきたとき、よく声を

かけられる。買い物しているときとかね。ほんと、気さくに声をかけてもらえるのがいい。「帰ってきたな」ってね。

—— 町にいた頃の横山さんはどんな少年だったんですか？

(横山) 無口で口べたでした(ワソです)。中学校までいたんだけど、陸上と野球をやった。1500m走の選手だったんだけど、運動会ではいつも一番だったよ(西北五の「かもしか」と呼ばれてた)。友達と一緒に遊び回る毎日で、ほんと野原を駆け回っている田舎少年だったな(勉強はキライ…)。

—— 横山さんは町のイベントで何回も司会をやってもらっています。司会をやってみて、町の雰囲気や気質を感じたりしますか？

(横山) イベントを見たいって人が来るので当たり前だとは思ってんだけど、打ち解けやすいっていうか親近感がありますね。帰ってくると町の中をドライブしたりするんだけど、やっぱりほっとするのがこの町なんですよ。

—— ドライブに出かけるんですか？
(横山) うん。どこかで会うかもよ。

—— 県内各地で活躍されていますが、外から見ると中泊町はどんな感じですか？

(横山) 知られていない(ちよっとシヨック)。イベントなんかで中泊のことを知っているか聞いても「えー、中泊ってどこにあるの」っていわれる。正直言って知名度が今ひとつだなと思うところがある。大使になったわけだから、知名度アップがんばらないと。

—— これから、PRしてくれそうですかね。
(横山) もちろん。テレビやラジオ、イベントなど、いろんな機会ですPRしていきたいと思っけど、飾らないありのままの中泊をPRしていきたい。「何も無いところだけど何か感じるよ、一度は行ってみて」というふう

に伝えたい。町に来た人が、何かを感じて何か

を持って帰ってくれたらいいなと思いますね。あまりがやがや騒がなくていいから、来た人が得した気持ちになってくれたらとてもうれしい。

—— 最後に、横山さんのふるさとへの思いを聞かせてください。

(横山) 住んでいる人たちが笑顔絶やさないようにしてほしい。この先ずっとこうあり続けてほしいなと思います。変に近代化なんかしないで、このままにしてほしい。これがわがふるさとだよ、って言えるような、田舎らしく残ってくれるのが一番いいかな、と。みんなで助け合って生きているのが、この町の良さだと思うので。





——大使になった感想を。
(木村) 「わで、いだな？」とまず思った。非常にうれしい話だが、金多と豆蔵が一番喜んでるのかな？

私もこれからがんばっていききたいと思っし、金多と豆蔵も、いっぱいがんばってPRしていききたいと言ってるよ(笑)。

——中泊ってどんなところがいいと思いますか？

(木村) やっぱり自然かな。広大な大地と海の幸、小泊には絶景もあるし。観光面で、小泊の絶景はPRするに値すると思いますよ。それから

人情も厚い。これが一番いい所じゃないかな。

——芸の継承で苦労された点などがあると思うのですが。

(木村) 残すということの大事さは、これは本人じゃないとわからない。残してくれという声があるので、プレッシャーもあるし、どうやって残すか、という課題もある。あと、4代目にどうやって引き継ぐか、という問題もある。さまざまな課題がたくさんあるが、一つ一つ芝居をこなして、コツコツ積み重ねて、一人でも多くの人に金多豆蔵を知ってもらうことが近道かもしれない。とにかく今は、一步一步、地道に積み重ねていくだけです。ね。

——農業を営む傍らでの公演活動ですが、大変じゃないですか？

(木村) いやー、これは大変ですね(笑)。両立することの難しさというか、芸人は家族の理解と協力がなければやっていけないな、とつくづく思います。芸をやっている人は時間が不規則で、家族サービに時間がなかなか取れないんですよ。(今回大使に任命された三上さんも横山さんも



そうだと思えますよ。少なからず家族を犠牲にしている部分があると思う。家族には本当に感謝しています。

——一緒に公演をされているお姉さんも大変でしょうね。

(木村) やっぱり姉も家庭を犠牲にしている部分があると思うよ。これも、旦那さんの理解があつてこそ。本当にありがたいと思っています。

——津軽中里駅の金多豆蔵人形劇場ができてから、周りの反応がだいぶ変わったと思いますが。

(木村) 私が人形劇をやつてこれたのは、まずこの人形劇をなくするには惜しいと思ひ、とにかく残そうという思いから。それに、周りの人がみんな応援してくれた。今では文化財に指定してもらい、さらに劇場の整備まで行ってもらった。町長はじめ、皆さんのおかげです。今のよに金多と豆蔵が有名になったのは、

皆さんの応援があつてこそだと心の底から思います。

劇場や出張先で劇をやっている、今では金多豆蔵という「ああ、あの中泊の人形劇ね」という声をたくさんいただく。金多豆蔵がたくさんの人に認知されていくのもうれしいが、人形を通して町のPRにつながっていくには、これほどうれしいことはない。

——金多豆蔵人形劇はこれからどんな公演活動を行っていきますか？

(木村) 今までどおり。背伸びせず、地道に、自然体でやっていきたい。今回このような大使の任をいただいたが、普段の公演活動の中で、町をPRしていきたいと思う。私は人形師だから、自分ではなかなか人前では話しづらいけど、金多と豆蔵がたくさんPRしてくれると思うよ(笑)。

——木村さんは地元にお住まいですが、木村さんが考える「ふるさと」とは何でしょうか？

(木村) うーん。今のままの場所かな。自然の良さをそのまま残した、今のままが本当にいいんじゃないかな。食べ物、自然、空気がよくて、遊ぶ場所があつて、これだけいいところがほかにある？ 本当にこのままでいてほしいと思いますね。